

和尚（おしょう）さんと小僧（こぞう）さん

昔々、ある山寺に、ある和尚さんと、幼い弟子が住んでいました。和尚さんは意地悪で、寺の参拝客が置いていったお菓子を、その小僧さんに決して与えませんでした。

ある日、和尚さんは参拝客の一人から甘酒をもらいました。寺から出かけなくてはいけなかったのに、少年に言いました。「いいかい。これは甘酒という毒物だ。飲めばすぐに死んでしまう。絶対に飲んではいけない。わかるか？」

小僧さんは、寺に一人でいる時、心の中で言いました。「お師匠様（おししょうさま）は、これを飲むとすぐに死ぬと言っていた。でも、きっと嘘だろう。きっと、私がこれを飲むのを恐れているんだ。」

小僧さんは瓶（びん）のふたを開け、指に甘酒を少しつけてなめました。「わあ、こんなに甘い飲み物は初めてだ」と彼は思いました。彼はどんどん飲み続け、止めることができませんでした。

やがて少年は甘酒を全部飲み干してしまったことに気づき、不安になりました。「あ

あ、師匠が帰ってきたらどうなるだろう？きっと怒って、罰を受けるだろう。どうしよう？」

しばらく考えた後、少年はいい考えを思いつきました。お寺には土でできた大きなだるま人形がありました。彼はそのだるまを蹴りました、そしてだるまは粉々に割れてしまいました。

和尚さんが帰ってくると、小僧さんは縁側（えんがわ）に座って泣いているふりをしました。和尚さんは尋ねました。「小僧、どうしたんだ？なぜ泣いているんだ？何が起こったというのだ？」

小僧さんは言いました。「和尚さま、本当に申し訳ありません。部屋を掃除していたら、だるま人形を壊してしまいました。死にたくなって、甘酒を飲んでしまったんです。飲み続けましたが、まだ死にません。」

和尚さんは笑い、小僧さんに言いました。「おまえはとても賢いな。それでも罰を与えるよ。」